

虹のかけ橋

兵庫県立但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

「不登校児童生徒の 学校適応に役立つ学校づくり②」

福岡教育大学 教授 西山 久子

不登校状態にある子どもにとって、移行期にどう備えるかは重要な問題です。週明け、新学期、新年度、そして転校や進学などの際、表情には表れなくても大きな決意をしています。チームの力を活用して学校が行える組織的支援と移行期に向けた個別支援を考えてみます。



1 援助体制における会議の設定

児童生徒の課題について、援助ニーズにより「1 次的援助（支援）／2 次的援助（支援）／3 次的援助（支援）」に分け、教職員全体が共通理解することは重要です。その上で配慮したいことを述べます。

《学校全体で同じ援助ができるように》

経年的に安定した適応援助が実践されている学校では、どの学級・学年でも概ね標準化された援助ができるよう工夫されています。その項目は次の通りです（表1）。

- ①人事面：年間を通して各役割を分担したメンバー任命
- ②プランニング：生徒指導・教育相談の年間計画・定例会議・事案発生に伴う臨時会議の設置
- ③ツール：ニーズ把握、会議の推進手順、各担当者の対応を標準化するための資料準備
- ④ルール：生徒指導・教育相談に関するポリシー・きまり、相談室等の運営基準の共有
- ⑤周知：運用する立場での教員研修や、利用者としての児童生徒・保護者向け広報

表1 生徒指導・教育相談体制を構成する要素

	項 目	内 容
人事面	コーディネーター	全体を把握し生徒指導・教育相談等を遂行
	推進メンバー	定例会議メンバー（例：管理職・教育相談／生徒指導担当者・特別支援教育コーディネーター・学年主任等）
	外部資源	個別課題で協力を仰ぐ校外資源（例：スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、療育機関、福祉機関、医療機関など）
プランニング	年間計画	活動の定例化と予防的・開発的取組の導入
	ミーティング	目的の明確な会議の設定（進捗状況を把握する定例会議、問題事案に対応する臨時会議、具体的な課題解決の会議）
	行事	子どもの成長に役立つ行事（例：体育祭）の設定

ツ ー ル	スクリーニングシート	子どものニーズ把握
	会議の手順表	会議の円滑な遂行
	ガイドライン	相談室運営や生徒指導・教育相談に関する規定
	マニュアル	運営(チーム支援など)の流れの標準化
ル ー ル	校訓・校則	生徒指導・教育相談の基本的ルール
	学校経営基本計画	生徒指導・教育相談の方針を含み、活動の根拠となる全体指針
	倫理綱領	学校全体・教育委員会レベルで遵守すべき行動規範
周 知	広報	学年・学校単位で発信する共通理解の内容提示
	教員研修	共通理解すべき内容・対策を確認する研修(事例検討も含む)

《ニーズ把握と対処の全体方針が立てられるように》

各先生が多様な視点で把握した支援ニーズの実態について、学校全体で相互に活用していくことが大切です。その年度だけを考えると力量の高い担当者が単独で調整しても情報収集は可能ですが、担当者任せでは後年の教職員全体の力量の向上に繋がりにくいようです。学校適応援助において、担当者の教育相談に関する力量は重要ですが、一人に依存する対応は年度ごとの転任や担当換えによる不安定さをぬぐえません。

例えば、「不登校から教室復帰を試みている中学生が、教育相談担当者が代わったことで、学年の変わり目に異なる対応となり、ほぼ順調だった週2日の教室参加ができなくなった」などの話がよく聞かれます。学校適応援助のリスクマネジメントの観点から、校内で共通のルールやツールを用いて組織的に対応することが安定した実践につながります。力量のある担当者が孤軍奮闘するのではなく、力量を活用して体制作りを目指したいものです。

2 効率的なチーム支援に向けて

「チーム援助」の重要性は疑う余地がありませんが、課題解決へのチーム援助会議の実施には障壁があるようです。課題の見極めや、時間の確保といった点は、現場での懸案事項のようです。

- ①対象：推進担当者が会議を準備・調整する場合も、何をチーム援助会議で検討するか、誰が関与するか、学年間の齟齬がないか等は、定例推進会議(表1)で確認したいものです。
- ②時間：多忙な現場で会議の効率化は重要な配慮事項です。校内の協力者も時間の見通しが立てば、会議の参加への心理的負担が軽減します。表2は「具体的な課題解決のためのチーム援助会議」の進行の雛形です。ある小学校では、2時間以上かかっていた会議を雛形の活用で1時間以内に収められました。
- ③態度：不登校児童生徒の学級担任は、責任を強く感じ、チーム援助会議への参加にも消極的になりがちです。援助に向け、解決志向でポジティブな会議を目指したいものです。抱えた不安が軽減されるような会議運営を意識することで、気になる子どもの話を出しやすい雰囲気生まれ、抱え込み解消に繋がることでしょう。

表2 チーム援助会議アジェンダ(時程(45分)) **短縮版25分**

- ・はじめに(5分) **3分**
 - －全体のルールやテーマの確認:慣れると短縮できる
- ・情報共有(15分) **見取りの共有9分ほど**
 - －各自が持っている情報・進捗状況を共有する
- ・支援策検討(20分) **対策案検討9分ほど**
 - －解釈(仮説)案から、最も近そうなものに合意する
 - －支援案を出し合い、そこから最適なものに合意する
 - －役割分担を具体的な行動および時間まで決定する
- ・まとめ(5分) **役割の確認4分**
 - －決定事項の確認と次回の会議日程を設定する
 - －相互に感謝し合って終了(香田・西山, 2010をもとに修正)

補足 移行期における子どもが自身の学びを考える仕組づくり

新学習指導要領では、小学校段階から経年的にキャリア発達を促進させることが更に重視されます。「どのように社会とかかわり、より良い人生を送るか」に向けて「学び・働き・生きる」ことをキャリアと位置づけ、特別活動や高校「公共（仮称）」及び全教科で学習します。

不登校状態にある児童生徒がこの活動を適切に行うには、教室で行われるガイダンスを中心としたキャリア教育や進路指導だけでは不十分です。全体指導だけでなく、カウンセリング等を通じた個別的な将来の自己像、それに至る指導のニーズに応じた対応が重要です。

【個別の教育計画】

学校教育が広く若者の自立や社会性の向上を目指すなら、学齢期を終えた時点で進路（針路）や生き方の選択肢を理解し、自己理解を踏まえて目指す方向性を明確化します。いわば「自分の教育計画」を自分でデザインする力をつける仕組が必要です。不登校傾向の児童生徒も自身が送りたい人生に向けてその時点でできることと、将来に向けて身につけたい力量・つけられそうな力量を明確化していく過程が重要です。

その場合、個別の教育計画作りには「保護者が子どものことをどう理解しているか」と、「保護者が何を願っているか」を把握しておくことが不可欠です。心理や特別支援領域等のアセスメントと、教育の専門家としての先生方の見取りをもとに計画を立案していきたいものです。



◆◆筆者紹介◆◆

西山 久子／にしやま ひさこ

カリフォルニア州立大学カウンセリング修士課程修了、兵庫教育大学大学院連合学校 教育実践学専攻修了博士（学校教育学）、カウンセリング学修士、教育学修士
専門分野：スクールカウンセリング、学校教育相談、学校組織臨床、学校心理学

「不登校に関する研修会」～未然防止、予防的観点から～

「いいところ探しから始めましょう！！」



新見公立大学
・新見公立短期大学
教授 住本 克彦 先生
7/21 県立但馬やまびこの郷
(朝来市)

不登校の未然防止と早期対応：クラスの中での人間関係づくり
～構成的グループエンカウンター（SGE）の演習を取り入れて～

SGEには人間関係づくり、自尊感情の育成、保護者との連携によりよい効果があり、人と人が繋がるためには自己開示が重要であることをお話いただきました。「みんなでイエイ！」など授業でも実践できる幾つかのワークを体験することで、子どもたちの気持ちに近づき、心のエネルギーが高まっていくことが実感できました。

演習では学級でできるソーシャルスキルトレーニング（アイ・メッセージ）、自己肯定感を高めるための見方を変えた表現（リフレーミング）について考えました。

参加者からは「安心して話し合うことで人間関係のつながりが形成されていくことが実感できた」等の感想がありました。

「ポイントは傾聴すること、勇気づけること」



名城大学・大学院
教授 曾山 和彦 先生
8/19 姫路市市民会館
(姫路市)

気になる子とその保護者へのかかわり方
～発達障害が疑われる子の支援に向けて～

現代の子ども像や気になる子の理解、ソーシャルスキルトレーニング等を活用しながら行う支援についてお話しいただきました。アイ・メッセージによる声かけは、支援が必要な児童生徒だけでなく他の子どもたちに対しても自尊感情を高める方法であると実感できました。演習ではストレスの対処法と物事をポジティブに捉えられるような相談活動について考え、子どもたちから出てきそうな悩み相談にどう応えていくかを話し合いました。

参加者からは「保護者の思いや学校としての役割について改めて考える機会となり、『カウンセリング理論』を実践していきたいと思う」等の感想がありました。

「学期始めは楽しい活動から」



神戸親和女子大学
准教授 長谷川 重和 先生
8/30 県立淡路文化会館
(淡路市)

人間関係を育てる集団づくりを生かした学級経営
～コミュニケーションスキルの演習を取り入れて～

学級における人間関係を促進する教育的グループワークを小グループでのエクササイズ(アドジャンなど)を交えながらお話し頂きました。よりよい関係を築いていくためには、目的をはっきりと持って子どもたちに伝えていくこと、指示する姿勢ではなく考えさせていく接し方がポイントであることが実感できました。

演習では自由な雰囲気の中で、人とかかわることを苦手とする子どもたちに対し、会話のきっかけの作り方をどのようにして伝えるかについて考えました。

参加者からは「学級でのルールづくり、リレーションの形成の段階的な取組について学ぶことができた」等の感想がありました。

「望ましいIP体験とは？」



兵庫県立光風病院
精神科・児童精神科
医師 木下 直俊 先生
9/23 県立総合体育館
(西宮市)

医療の観点から見た不登校状態にある子へのかかわり方
～成功体験へどう導くか～

様々な事例を通して不登校の子どもへの段階別対応の必要性について医療の立場から説明され、自己選択・自己決定によるポジティブな体験が不登校の改善に役立つこととお話しいただきました。子どもたちの気持ちを大切にしながらネガティブ体験とならないように配慮したり、リフレーミングによる伝え方の技量を高めていく必要があると感じました。

演習では子どもたちとのかかわり方のシーンをいくつか体験しながら、自尊感情・自己肯定感を高める言葉の効果的な伝え方について考えました。

参加者からは『『将来社会とかかわり続けられる大人になってほしい』という目標達成のため、どのような体験が必要かがよく分かった』等の感想がありました。

「スマホの問題は〇〇〇の問題」



兵庫県立大学
准教授 竹内 和雄 先生
10/13 県立教育研修所
(加東市)

スマホ時代でも変わらない子どもたちとのかかわり方
～ネットを取り巻く状況とトラブルの未然防止に向けて～

言葉の伝え方によるトラブルやスマートフォンでの被害事例を通して子どもたちを取り巻く環境に触れ、いかにして楽しいクラスにしていくかが未然防止のポイントであることをお話しいただきました。いつの時代も大切なのは“心”であり、今後も学校・学級が子どもたちにとって安全で安心できる場所にしていく必要があると感じました。

演習ではネットトラブルの事例を通して対応策を話し合い、今後、普段学校で起こりそうなトラブルの対応について考えました。

参加者からは、『「リアルを楽しく！ネットより楽しい現実を作らなければならない』という言葉が心に残った』等の感想がありました。

各回の講演記録はホームページをご覧ください。 <http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

県立但馬やまびこの郷の事業について

(1) 4泊5日以内の宿泊体験活動

料理・スポーツ・製作など様々なプログラムを体験し、体を動かすことで子どもたちは変化していきます。初めて利用される場合は、緊張や不安の高い子どももいますので、まずは見学や1日体験からスタートされることをお勧めします。宿泊日数等についても、個々の子どもの状態に応じて柔軟に対応します。



(2) 教育相談

電話相談や来所相談、また所長によるカウンセリング（木、金）も行っていきます。ぜひ一度お電話ください。



(3) 指導者の研修

「公開講座」や「不登校に関する研修会」など、不登校の未然防止、初期対応を中心に、毎回違ったテーマで研修会を開催しています。

また、各種研修（校内研修）に指導主事を派遣し、未然防止の取組や子どもたちへのかかわり方について話をさせていただきます。

(4) センター的な役割

機関紙（「虹のかけ橋」教職員向け、「やまびこ」保護者向け）の発行や不登校に関する調査研究を行っています。今年度末には、適応指導教室の運営や活動・学校復帰への手立て・保護者支援についてまとめた「適応指導教室運営ガイドプラン」を作成します。

適応指導教室を始めとする様々な関係機関がそれぞれの特長を生かしたかかわり方の中で、より効果的な支援に向けて活用いただくことができれば幸いです。



〒669-5135

兵庫県朝来市山東町森字向山 45-101 TEL(079)676-4724 FAX(079)676-4721